

## 赤ちゃんの前だから気をつけよう

“言葉を、数多く、正確に知っていることが、他のどんな特性よりも成功の原因である”ことが、アメリカで実証されたことは、前に述べました。この言葉の教育は、家庭で、生まれた時からすぐに始められます。

赤ちゃんは、生まれると間もなく、人の声を耳にし、それを聞くことによって聴力を育てつつ、聞いた声を脳に一つ一つ録音しています。それが、やがて赤ちゃんの発する言葉の基礎になるのです。

人間の頭脳は、テープレコーダーのように耳からはいる声を録音し、そのくり返しの多いものから、これを再生装置に移し、話す能力に換えていくもののように思われます。

鈴木鎮一先生は、「音感は生まれつきのものでなくて育てるものだ。だから、赤ちゃんの時から、できるだけ最高の音楽、最高の演奏を聞かせることが大切だ」とおっしゃっています。言葉の教育についても、全くこれと同じように考えなければなりません。

わたしの知人に、三歳のお子さんのある方がいます。最近にわかにお話が活発になってきて、盛んに両親とお話をするようになったそ

うですが、その中に、ぽつんぽつんといなかの言葉やアクセントが出てくるのだそうです。

現在、その知人の家には標準語以外の発音をする人はいないので不思議のようですが、実は、このお子さんは、生後二年ほど、お母さんの実家のおばあさんのそばで育ったのです。つまり、ものも言えないし、歩くこともできないころに録音しておいた田舎訛りを、おしゃべりができるようになった今、再生しているわけです。そう考えるよりほかに、その理由が考えられないのです。

そうしてみると、赤ん坊だからなにをしても、なにを言ってもわからないというわたしたちの考え方は、きわめて危険と言わなければなりません。父親と母親とのいさかきも、赤ちゃんは、ちゃんと録音してしまうからです。

すなわち、“赤ちゃんの前だから安心だ”ではなくて、“赤ちゃんの前だから気をつけよう”でなければなりません。そして、家族は、できるだけなごやかに暮らし、きれいな言葉、美しい声で会話をしなければならぬこととなります。

早口でしゃべる親の子どもはやはり早口に、乱暴な大声でしゃべる親の子どもはやはり乱暴な大声になりがちです。